

本書は、1984年（潮文社）発行の新装版です。

## 訳者まえがき

ノストラダムスの予言というのがあります。それによると、人類は一九九九年七月の第一週に滅亡するのだそうです。また、これに類する、人類の終末を暗示する予言がいろいろ取沙汰されています。しかし、ノストラダムスならずとも、もしこのままなら、近い将来、人類の運命が非常に悲観的であることは、誰の目にも明らかどころです。たとえば、アメリカやオーストラリアでは、小学生の五十パーセントが、二十五歳までに死ぬと、アンケートで答えています。日本でも、小中高生の四十八パーセントが、戦争の不安に脅えていると答えています。

この恐怖の原因は第一におそらく核戦争による滅亡ということでしょう。第二は、公害による生態系の破壊による地球の死滅ということでしょう。そして第三は、人心の悪化・狂気・粗暴化に伴う、人類の前途の悲観ということでしょう。これらの背景にあるのは、あるいは大量消費社会という、いわば物神崇拜のごとき、人類の価値観の歪みであるかもしれません。そして、この価値観を創出し推進している、それこそ、私達が今なお賛嘆し誇りとも思っている、科学技術文明と呼ぶ、近代文明そのものかもしれません。

ノストラダムスの予言には重大な欠陥があります。それが当るか当らぬかということではなく、人類の滅亡を予言しながら、その救いの方法については、一言も述べていないことです。世の予言の類の多くは、同じ欠陥をもっています。これではいたずらに人類に恐怖を与えるだけで、予言はいささかも人類のプラスにはなりません。困ったものです。

シルバー・バーチの通信は、唯一つ、どうしたら人類が二十世紀の破滅から救われるか、その方法についてだけ述べています。

もし、読者が真剣に人類の前途を憂え、脱出の道を求めておられるなら、どうか謙虚に、貴方の理性にだけ訴えて、この通信を読んでみて下さい。おそらく貴方の胸からは、核戦争の恐怖も、生態系破壊や人心荒廃の不安も消え去り、これらが、唯一つの単純な真理によって、引き起こされ、また解消されたりする原理が、貴方の目にはつきり確信をもって映ってくるでしょう。それこそ、新時代の到来というものです。

本書は、シルバー・バーチの通信（全十一巻）の中の第一巻“TEACHINGS OF SILVER BRCH”の訳です。初版は一九三八年ですが、今日に至るまで多くの版を重ね、スペイン語・スウェーデン語・フィンランド語などにも翻訳され、いわば二十世紀のバイブルとして、流布しています。原著には文中に番号はありませんが読みやすくするため訳者がつけました。

またもし、読みつづけるうちに、「シルバー・ビーチとは誰か」「通信とは何か」、これがどうしても気になるようでしたら、第十七章と解説をお読み下さい。

## 編者 A・W・オースティン 序

シルバー・バーチは「この通信の著者は私ではない、私は高い所から来る通信の仲継者です」と言っています。私もこの通信をもつて、一切の英知をもつ霊魂からの絶対無謬むびやうの教えであると、主張するつもりはありません。霊界通信の目的は、我々が批判力を捨てて、霊魂の言葉に盲従することではないし、また、新宗教の創立を目的とするものでもありません。啓示は人間の受容力に応じて、時代とともに進歩していくものですから。

バーチはいつも理性に訴えて語ります。だから彼の言葉が貴方の理性に照らして誤りだと思われたら、これに反対なさるべきだし、少なくとも未解決の疑問として残しておくべきだと存じます。

この書は、何百回に及ぶ交霊会の通信の中から、私が問題別に抽出整理して編集したものです。従って、各章は一つづきのバーチの通信ではなく、三十〜四十回以上にわたる交霊会のバーチの言葉から、私が適宜抽出して構成したものです。つまり、問題別に一貫した思想となるよう、意図しつつ構成したものであることを、お断りしておきます。



私達は一片の信条、一冊の経典、一宗一派にこだわるものではない。ただ生命である神、その永遠の法、これに命を捧げるものである。

(第一章 神の計画(三)より)

# 第一章 神の計画





(二) 私達が地上に降りて来たのは、人々に靈的生命の秘義を伝えるためである。この真理が地上に広がれば、戦争や革命にもまして、一大変革が地上に起こることになる。それは魂の変革である。その時、世界のあらゆる所で、人々は天賦の賜物に目覚めて、魂の自由を限りなく追求することになる。その時、初めて世界から鎖が消える、今まで人々を縛りつけていた足枷あしかせが。

(三) 私達は一片の信条、一冊の經典、一宗一派にこだわるものではない。ただ生命である神、その永遠の法、これに命を捧げるものである。

(三) 靈的な大きな力が、いま地上世界に向かって降りていく。地上のあらゆる国々で、次第にこの力が感得されていく。いま地上では大事業が進展している。それは地上の利己と無知を打破しようとする運動である。やがて時来たれば、この事業は必ず達成される。だがその前に、必ず大きな産みの苦しみがある。

(四) 世界はダマスクスの路上で、突如回心したパウロのように、唐突には変らない。靈的真理の光は少しずつ闇を貫いていくもの、人々が少しずつ真理を知っていくにつれ、また、神の使徒となる人物がだんだんとふえていくにつれて。靈に関することは、常に慎重な熟成と進歩を必要と

する。急激な変革は決して永続するものではない。私達はいつも永遠の目をもって、物事を眺め仕事を進めていく。

〔五〕 神の教えの通路となる者は、闇を出て光明こうめいへ向かい、無知から知へと進み、迷信を去って真理へと入っていく。彼等こそは世界の進歩に貢献する者であり、またまさに地上の唯物主義の棺ひつぎに、うちこまれる一本の釘である。

〔六〕 人間の進歩には二つの形式がある。一つは霊能の開発、他は靈性の浄化。もし靈性の練磨をさしおいて霊能だけの開発をはかるなら、その人はいつまでも低い靈的境涯にとどまらねばならない。反対に、両者ともどもに発達をはかるなら、大靈能力者となるだけでなく、人間としても立派な人物となる。

〔七〕 地上は今、流血と悲しみの涙で満ちている。地上世界は盲目だから、神の法に従って生きようとはしない。また私達の伝える言葉に耳をかそうとせず、私達の周りにある力に目をくれようとしめない。しかしながら私達の伝える真理は浸透していく。それは神から出る真理の言葉であるから。

〔八〕 神法に逆らつて生きようとする者は、自ら辛い収穫を刈り取る者。

神法に従つて生きる者は、物質的にも靈的にも豊饒ほうじょうと幸福の収穫を、その手で刈り取る者である。

〔九〕 どんな暗闇の中にあつても、決して希望を捨ててはいけない。そして次のことをしっかりと銘記して頂きたい。地上を住みよい世界に変えようとする人達は、最後には必ず勝つ。何となれば、彼等と共に在る力は、宇宙の至高の力であるから。

〔一〇〕 産みの苦しみがなければ、悲しみの涙がなければ、価値あるものは何一つ実現できない。地上世界はやがてこのことを、苦しみと悲しみの涙をもつて、学びとることになろう。いま私達は、物質界の暗黒をうち破ろうと活躍している。また私達の教えは、いま世界の至る所で、人々の心を啓発しつつある。こうして次第に、靈の光が地上に浸透していくにつれ、唯物主義の闇は消散するのである。

〔一一〕 私達は罰をちらつかせて、人を嚇おどすことはしない。皆さんに、怯懦きょうだで卑劣な人間になつてもらいたくないからだ。私達が願うところは唯一つ、人間の内部には神性があるということ、これを皆さんに知つて頂きたい。もしこれが理解できれば、人はいよいよ神性を發揮し、ますます